

(5) 主催事業における「体験活動」と「生きる力」の関連性の検証

【実践事業1】

1 事業名 悠遊学舎わくわくサマーキャンプ

2 期 日 令和3年7月26日（月）～31日（土） 5泊6日

3 参加者 小学生男子12人 女子6人 中学生男子3人 女子2人 合計23人

4 経 費 9,800円（食費6,410円，保険料200円，シーツ代100円，活動材料費3,090円）

5 事業内容

(1) 事業の趣旨

青少年研修センターをフィールドに、様々な体験活動を通して、達成感や満足感、仲間とつながるよさを味わわせることで、自己肯定感を高め、心身ともにたくましい鹿児島を育成する。

(2) 事業の特色

この事業は、小学5年生から中学生までを対象にした事業である。この期の子どもたちは、5泊6日の長期にわたって親元を離れるという経験は少なく、テントで宿泊したり食事を自分たちで作ったりする活動は、自分自身と向き合いながら自己の成長を実感することができる機会であり、他人と協力することの大切さやよさに気づき、それを実践していこうとする態度を養っていく場にもなっている。

また、「歴史」や「自然」についても体験的な学びを取り入れていて、白銀坂遠行では、以前は白銀坂が加治木町から熊本までをつなぐ主要な街道であったことを、本名川での活動では、生き物探しを通して小魚やえびなどの生物と環境との関係について、学べるように配慮した。

(3) プログラムを企画するに当たり

ア テーマの設定

「自分を高め、つながり感じる6日間」を事業全体のテーマ（めあて）として、それにつながるようにプログラムを設定した。また、1日ずつサブテーマを設定することで、参加者が目的意識をもって、活動に取り組めるようにした。

メインテーマ
「自分を高め、つながり感じる6日間」

- 1日目 「自分と向き合おう」
- 2日目 「友達のことを知ろう」
- 3日目 「鹿児島の歴史に学ぼう」
- 4日目 「鹿児島の自然に学ぼう」
- 5日目 「みんなで力を合わせよう」
- 6日目 「仲間との日々を振り返ろう」

イ 個から集団へ

自分自身と十分に向き合うとともに、仲間と協力する必要感をもたせるために、1日目の活動は、野外炊事からテント設営、テントでの宿泊まで全て個人での活動にした。2日目は、話合いを通してグループを作成し、以後グループでの活動、そして、5日目は全体で協力するそうめん流し作りと、個からグループ、グループから全体へと、全日程を通して参加者の集団に対する意識付けを行った。

ウ 帯活動の設定

1日目から5日目まで、2つの帯活動を設定した。1つ目は野外炊事による夕食作りである。野外炊事を帯活動として設定することで、火の扱いや調理に対する習熟度を上げて自信をつけさせ、主体的に活動に取り組めるようにした。2つ目は夜の話合いで、1日の振り返りや翌日の活動のKYTなどを帯活動で行った。話合いの場面を毎日設定し、自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりする場面を増やすことで、意見交換の活性化を図った。

6 日 程

悠遊学舎 わくわくサマーキャンプ 2021 日程

		7月26日(月)	7月27日(火)	7月28日(水)	7月29日(木)	7月30日(金)	7月31日(土)
宿直(本)		係長	内	西	池田	萩原・課長	
宿直(キ)		柳田・林	下別府・萩原	駿河・田下	中熊・中村	柳田・林	
6	00	▲	起床・洗面	起床・洗面	起床・洗面	起床・洗面	起床・洗面
	30		朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい
7	00		朝食 ・調理パン ・果物 ・ジュース	準備等	準備等	準備等	野外炊事 ・ピザトースト ・果物 ・ジュース
	30			朝食 (食堂利用)	朝食 (食堂利用)	朝食 (食堂利用)	
8	00		話し合い活動 ・グループ設定 ・午後の活動	白銀坂遠行 ※小雨の場合、雨具 着用で実施。 【雨天:室内運動会】 青少研出発(徒歩) ↓ 白銀坂下り口 ↓ 白銀坂上り口 ↓ 白銀坂下り口	川遊び 【雨天:スーパー竹と んぼ】 青少研出発(徒歩) ↓ 本名川 ・川の生き物観察 ・川遊び	そうめん流し準備 ・そうめん流し台 ・竹器 ・竹ばし	大掃除 ・テント撤収 ・キャンプ場清掃 ※ 写真撮影
	30		テント撤収 ※ 不要なテントのみ				
	30		受付				
10	00		入村式				
	30		オリエンテーション アイスブレイキング	野外炊事 ・カレーライス (食堂食材)			
11	00						
	30		※ 写真撮影	※ 写真撮影		ミニ発表会	
12	00	昼食 (食堂利用)	昼食 (注文弁当)	昼食 (注文弁当)			
	30	※ 写真撮影					
13	00	キャンプ場オリエン テーション		白銀坂下り口発 ↓ 青少研到着	本名川 ↓ 青少研到着		
	30	テント設営(1人1張) 【雨天:インナーテント 設営体験】	野外活動 ※ 参加者が決定 ・野外協力ゲーム ・かごんまの教えFA ・オリエンテーション 等	自由交歓	自由交歓 ※ 参加者が決定 ・自然散策 ・青少研もるっく 等		
14	00						
	30	炊飯場作り(個別)	【雨天:室内レク】		食材獲得ゲーム	キャンプファイヤー 計画・準備	
15	00						
	30	野外炊事 ・レトルトカレー ・飯ごう炊飯	段ボール窯作り	野外炊事 ・バエリア ・野菜スープ	野外炊事 ・アイデア料理 ※ 食材獲得ゲーム で獲得した食材を利用 して、各グループで 献立を考える。	野外炊事 ・バーベキュー (食堂依頼)	
16	00		野外炊事 ・段ボールピザ				
	30						
17	00						
	30						
18	00						
	30	片付け・準備等	片付け・準備等	片付け・準備等	片付け・準備等 ※ シーツ配布	片付け・準備等	
19	00	入浴	入浴	入浴	入浴	入浴	
	30			※ 洗濯(前半)	※ 洗濯(後半)		
20	00	夜の話し合い ・当日の振り返り ・翌日の計画 ・KYT	ナイトウォーク 【雨天:GWT】	星空観望 【雨天:森のフォトフ レーム】	森のフォトフレーム ※ 3日目と当日の天 候により、内容を変更 する可能性がある。	キャンプファイヤー	
	30						
21	00		夜の話し合い	夜の話し合い	夜の話し合い	夜の話し合い	
	30	就寝準備	就寝準備	就寝準備 ※ 洗濯物干し	就寝準備 ※ 洗濯物干し	就寝準備	
22	00	就寝	就寝	就寝	就寝	就寝	

※ 天候等に応じて、日程を入れ替えたり短縮したりして実施する可能性があります。(小雨決行)

自分を高め、つながり感じる6日間

6日目

「仲間との日々を振り返ろう」

- ・ミニ発表会
- ・退村式

このキャンプで、できることが増えたとし、友達もできた。自分に自信がついてきたぞ。



最後の発表まで、しっかりとやり遂げることができた。

竹を切り出すところから作るのは大変だったけど、全員で協力したから、完成させることができた。

5日目

「みんなで力を合わせよう」

- ・そうめん流し台制作、そうめん流し
- ・自主研修
- ・バーベキュー、キャンプファイヤー

そうめん流し
グループの枠を超えて課題に取り組むことで、全員で物事を成し遂げることの達成感を味わわせる。



集団（組織全体）

4日目

「鹿児島 naturally に学ぼう」

- ・川遊び・生き物観察
- ・食材獲得ゲーム、アイデア料理

食材獲得ゲーム、アイデア料理
メニューを決めるために互いにアイデアを出し合い、意思決定をさせる。コンセンサスを目指す。

みんなで力を合わせると、1人じゃできないことも乗り越えられるぞ。

3日目

「鹿児島の歴史に学ぼう」

- ・白銀坂遠行
- ・青少年もるっく

白銀坂遠行
鹿児島の歴史に触れるとともに、遠路を歩き切った達成感や仲間がいることの大切さを味わうために、白銀坂を歩く。



みんながいたから、白銀坂に登ることができた。

2日目

「友達のことを知ろう」

- ・話し合い（グループ設定）
- ・野外活動
- ・野外炊事（カレー、ピザ）

話し合い活動
キャンプに主体的に取り組めるよう、グループの設定については自分たちで決めさせる。

学校も学年も違うけど、協力してやっていけそうだな。



帯活動

- 野外炊事
集団の中の役割の大切さを自覚させるとともに、自己有用感や協力の大切さを味わわせる。
- 夜の話し合い
個人の振り返りをグループ全体でシェアリングすることで、課題を見出し、その解決、改善に向かう姿勢をもたせる。また、個人の振り返り（ワークシート）にも、職員が確実にコメントをするようにする。

集団（グループ）

1日目

「自分と向き合おう」

- ・入村式
- ・1人での食事（野外炊事）
- ・テントでの1人寝体験

1人食事、1人寝
1日目を1人で過ごすことで、自身と向き合わせる。

初めて会った人たちと、うまくやっていけるかな。



個人

自分1人だけだと、できないことが多いな。



8 活動の実際

(1) テント設営・野外炊事・一人寝（1日目）

自分自身とじっくり向き合い、自分一人ですることやできないことを捉えさせたり、仲間と協力することに対する必要感をもたせたりするために、1日目は、全ての活動を一人で取り組ませた。

最初に行ったテント設営では、中学生は自分の力で立てることができたが、小学生には自力で設営することが難しく、途中でどうにもならなくなってしまいう子どもが大半だった。その際に、自分から周りの友達に「手伝って」「一緒にやろう」と声をかけることができる子どももいれば、周りから声をかけてもらうのを待つ子どももいて、後者には中学生が積極的に声をかけて設営を手伝っていた。

次の野外炊事では、2つの飯ごうを使い、1つはご飯を炊き、もう1つはお湯を沸かして、その中でレトルトカレーを湯煎した。薪の組み方がうまくいかず、火力が弱かったり、途中で火が消えたりして、ご飯が炊き上がるまでに時間がかかってしまう子どももいたが、最後は全員が無事に食事をすることができた。宿泊学習の経験が全くない、宿泊学習は経験しているが野外炊事をやったことがない、もしくは、火を扱う係ではなかったなど、それぞれの経験値は様々であったが、自分一人で作り上げたカレーライスを、皆おいしそうに食べていた。

1日目の就寝は、テントでの一人寝である。4～5人用の大きなテントに一人で寝ることは、ほとんどの子どもにとって初めての経験で、寝付けない子どももいたようだった。

1日目を一人で過ごしてみて、自分でテントを設営できたことや薪でご飯を炊いて食べることができたことに達成感を感じている子どもがいる一方、一人で全てをやることの大変さに気付いたり、一人をさびしく感じたりしている子どもも多くいた。



テント設営



一人での野外炊事



一人での食事

【参加者の感想】

- 一人のいいところや悪いところが分かった。
- やることがたくさんあって、一人でやるのは大変だった。
- 一人でテント泊も一人ぼっちでこわかった。

(2) 話し合い活動・野外活動・野外炊事（2日目）

1日目の個人での活動を経て、2日目の午前中に話し合いの場を設定した。子どもたちに残りの5日間をどのように過ごしたいかを問いかけると、多くがグループの必要性を訴え、そこから、中学生を中心に全員でグループを作るための話し合いをした。話し合いでそれぞれが自分の意見を発表し、それらの意見に基づいてグループができあがっていくという経験を通して、今後の活動により主体的に取り組めるようになることを意図して設定したものである。話し合いの結果、23人が3つのグループに分かれて活動することになった。

グループの設定の後には、野外活動を行った。こちらにも、本センターのプログラムである「野外協力ゲーム」「かごんまの教えフィールドアスレチック」「オリエンテーリング」の中から何をしたいかを子どもたちが話し合い、その結果「かごんまの教えFA」を実施することになった。活動のねらいは異なるが、どれもグループの協力が必要とされる活動である。体を動かしながら、互いに声を掛け合い、協力をする中で、子ども同士互いに打ち解けてきて、笑顔が見られるようになった。

野外活動の後には、野外炊事でカレーライスを作った。1日目の一人での活動に対して、グループで協力しながらの活動である。食器係、食材係、薪係とグループの中で役割を分担し、皆で力を合わせて作ったカレーライスは、1日目に自分一人の力で作ったレトルトカレーとはちがうおいしさがあり、それぞれのグループで楽しそうに食事をとっていた。

1日目の個人での活動を経験したからこそ、2日目の活動では、仲間と一緒にいることの楽しさやありがたさ、協力することのよさを強く感じる事ができたようである。



話し合い活動
【参加者の感想】

グループでの野外活動

グループでの野外炊事

- (話し合いは) 自分たちで考えるきっかけ、しゃべるきっかけになった。
- 自分に自信をもち、自分の意見を発表することができた。
- (野外炊事は) グループで協力し分担することで、スムーズに進められた。

(3) そうめん流し・キャンプファイヤー (5日目)

23人全員で協力することのよさを味わわせるために、5日目にそうめん流しとキャンプファイヤーを設定した。最初は、各グループで竹を切り出し、事前に考えたアイデアを基にそうめん流し台を作成した。竹を切って中の節を取り除いたり、竹を組み合わせて脚を作ったりするのは大変な作業だったが、グループの中で役割を分担したり、交代しながら作業に取り組んだりするなど、それぞれのグループが協力してそうめん流し台を作成していた。グループでそうめんを食べた後に、3グループのそうめん流し台を組み合わせて、1つの長いそうめん流し台を作成した。そうめん流し台が完成すると皆から歓声が上がり、そうめんが流れ出すと、こぞってそうめんをすくっていた。

5日目、サマーキャンプの最後の夜はキャンプファイヤーを行った。スタンプ(レクリエーション)で何をするか、各グループで事前に話し合いをしてから本番に臨んだ。想定通りにスタンプが進行できずにとまどってしまうグループもあったが、他のグループが非常に協力的で、積極的にフォローをしたり、励ましたりして、最後の夜をみんなで楽しもうとしていた。

4日目までの活動で、グループ内の交流は深まっていたが、5日目のそうめん流しやキャンプファイヤーを通して、全体で物事を成し遂げる経験をすることにより、仲間意識も高まったようである。



グループでそうめん流し台作成



全員で作ったそうめん流し台



キャンプファイヤー

【参加者の感想】

- 楽しく作ることができたし、自分の役割を果たすことができた。
- グループでそれぞれ切る、削る、割るなど、分担してすることができた。
- (キャンプファイヤーで) 最後の夜、みんなともっと仲良くなれた。

9 事業アンケートから

(1) アンケート結果

○ この事業に参加したきっかけは何ですか。	
保護者（父母など）にすすめられた。	13
自分で決めた。	8
その他（姉が参加していたから）	1

保護者にすすめられた 13
自分で決めた 8
その他 1

○ 自分の中で「変わったかも」「成長したかも」と感じたこと、これから、どのようなことを意識していきたいかを書いてください。

- ・ 自分から楽な方を考えず、楽じゃない考えをもてるようになった。
- ・ いつも家で手伝いをしないで遊んでいるが、皆と協力するところが変わった。
- ・ キャンプをして、できなかったテント張り、テントの片付けができるようになった。洗濯をしたり、自分の意見もちゃんと言えるようになったのが成長した。
- ・ 自分がいやなことを進んでできた。白銀坂がきつかったけど、最後まで登り切ることができた。しかも、友達が10人以上できてとてもうれしかった。
- ・ 仲間と協力することができるようになったら、自分で考えて、自分から進んで行動できるようになった。
- ・ 6日間で、自分の目標の「自分に自信をもつ」「自分の意見をもつ」というところでは、今の自分より少しは成長できたかなと思う。

(2) 考察

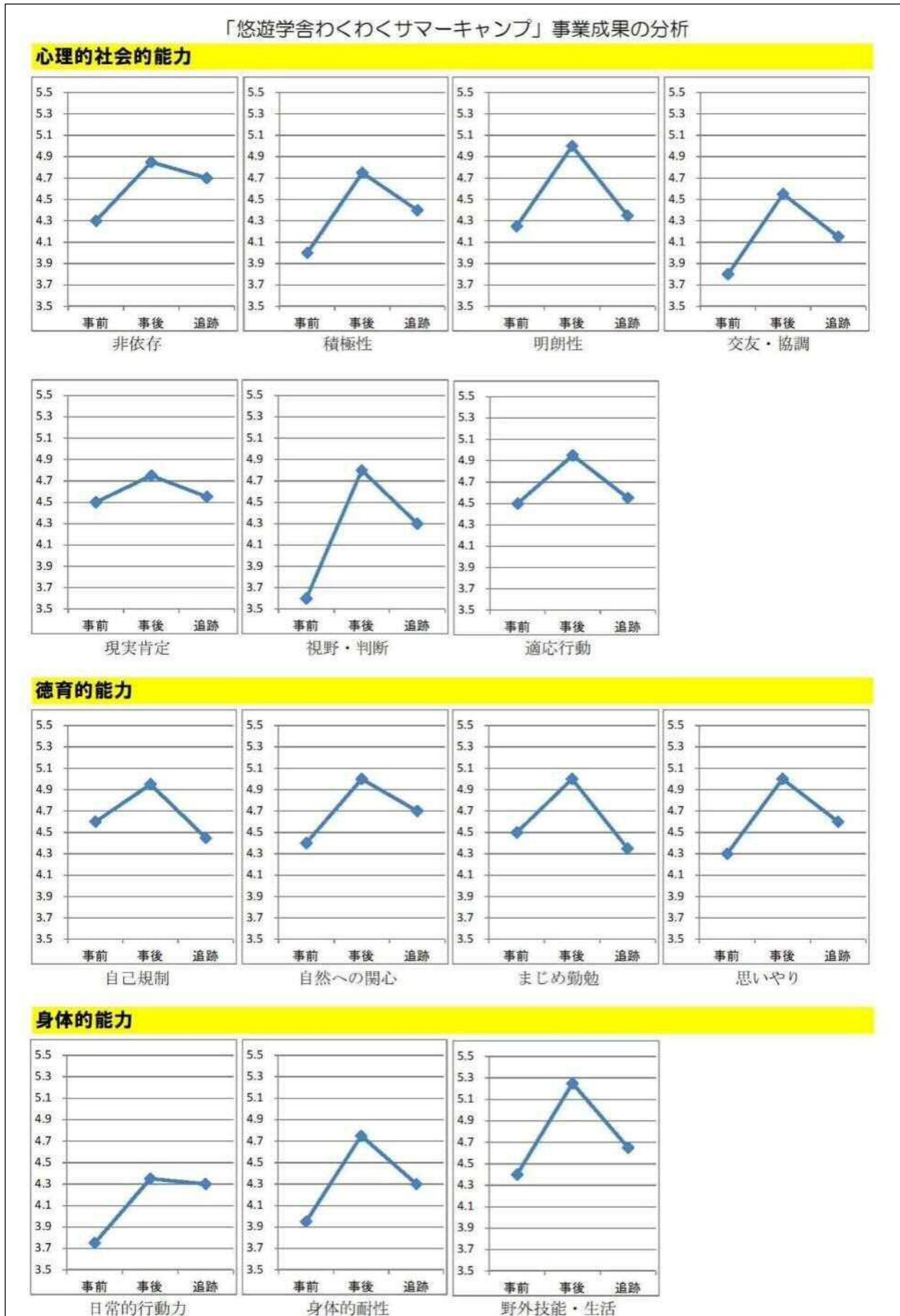
アンケートの結果、自分の意思で参加を決定した子どもは8人で、半数以上が保護者に勧められて参加していることがわかった。5泊6日の長期の事業に対して、「我が子を鍛えたい」「たくましくなってほしい」と強く願っている保護者も多数いたのではないだろうか。また、その願いとは裏腹に、長期のキャンプに大きな不安を抱えてきた子どもも多かったであろうことが考えられる。

しかし、最終日に、6日間を通しての変化や成長について尋ねたものからは、全員から前向きなコメントを得ることができた。「虫をいやがらなくなった」のような具体的な気付き、上記のように客観的に変容を捉えたものもあった。6日間のプログラムを企画するに当たって、「自分を高め、つながり感じる6日間」のテーマにつながるよう活動を設定してきた。それらの活動を通して、できるようになったことが増え、自分に自信をもつこ

とができたり、仲間と協力することのよさを感じたりすることができたようである。

10 I K R調査から

(1) 調査結果



生きる力			平均値		
			事前	事後	追跡
心理的 社会的 能力	非依存	いやなことは、いやとはっきり言える 小さな失敗をおそれない	4.30	4.85	4.70
	積極性	自分からすすんで何でもやる 前向きに、物事を考えられる	4.00	4.75	4.40
	明朗性	誰にでも話しかけることができる 失敗しても、立ち直るのが早い	4.25	5.00	4.35
	交友・協調	多くの人に好かれている 誰とでも仲よくできる	3.80	4.55	4.15
	現実肯定	自分のことが大好きである 誰にでも、あいさつができる	4.50	4.75	4.55
	視野・判断	先を見通して、自分で計画が立てられる 自分で問題点や課題点を見つけることができる	3.60	4.80	4.30
	適応行動	人の話をきちんと聞くことができる その場にふさわしい行動ができる	4.50	4.95	4.55

生きる力			平均値		
			事前	事後	追跡
徳育的 能力	自己規制	自分勝手な、わがままを言わない お金やもののむだ使いをしない	4.60	4.95	4.45
	自然への関心	花や風景などの美しいものに、感動できる 季節の変化を感じることができる	4.40	5.00	4.70
	まじめ勤勉	いやがらずに、よく働く 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.50	5.00	4.35
	思いやり	人のために何かをしてあげるのが好きだ 人の心の痛みがわかる	4.30	5.00	4.60
身体的 能力	日常的行動力	早寝早起きである 体を動かしても、疲れにくい	3.75	4.35	4.30
	身体的耐性	暑さや寒さに、負けない とても痛いウガをしても、がまんできる	3.95	4.75	4.30
	野外技能・生活	ナイフ・包丁などの刃物を上手に使える 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	4.40	5.25	4.65

(2) 考察

- 全ての項目において、事後が事前を上回っている。大幅に上回っている項目の中でも、「積極性」「明朗性」「交友・協調」「思いやり」については、「自分を高め、つながりを感じる6日間」のテーマにつながるような活動の設定と、それを意識した指導を継続的に行ったことにより、主体性や協調性などが高まったと考える。
- 「視野・判断」は1か月後の追跡調査でも高い値を示している。本事業では、1日の振り返りをして、それを全体でシェアリングしたり、翌日の活動について計画を立てたりする夜の話合いを帯活動で設定した。そこでの経験が、学校生活でも生かされているのかもしれない。

11 成果と課題

〈全ての活動を振り返って〉

新型コロナウイルス感染症対策のための活動の制限や、夏のキャンプという過酷さの中での実施であった。初日に何をしたいか困惑していた子どもが、グループの仲間と談笑しながら滞りなく自分の役割をこなしている場面をたくさん見ることができた。個人としても集団全体としても、成長を十分に感じることができた事業であった。

〈成果〉

- 「自分を高め、つながり深める6日間」をテーマに、個人からグループ、集団全体の活動となるようプログラムを編成したことで、参加者が自分の成長や仲間とのつながりを感じることができた。
- 1日ごとにサブテーマを設定し、KYTを含めた事前指導を行うことで、参加者が目的意識をもって活動に取り組むことができた。
- 野外炊事や夜の話合い活動など、継続的な活動を設定することで、参加者のスキルや関係性が深まり、主体的に活動に取り組むことができた。

〈課題〉

- 新型コロナウイルス感染症対策の検温やマスク着用の確認、活動時の熱中症対策等に想定以上に時間がかかってしまった。参加者の疲労度等も考慮して、時間に余裕のあるプログラムを設定する必要がある。
- 5泊6日にわたる長期の事業で、全所体制で運営にあたったが、生活指導の方針等で、細かい部分の共通理解が不十分だった。今後、共通実践ができるように、指導体制の見直しが必要である。

【実践事業2】

1 事業名 悠遊学舎 わくわくウインターキャンプ

～キャンプで感じよう!仲間のよさを!!～

2 期 日 令和4年1月8日(土)～10日(月) 2泊3日

3 参加者 小学生男子9人 女子11人 合計20人

4 経 費 3,100円(食事代2,180円, 保険料200円 シーツ代50円 活動材料費670円)

5 事業内容

(1) 事業の趣旨

冬の厳しい寒さの中, 青少年研修センターでの様々な体験活動を通して, 参加者同士が協力するよさを味わい, 仲間とのつながりの大切や集団の必要性に気付かせる。

(2) 事業の特色

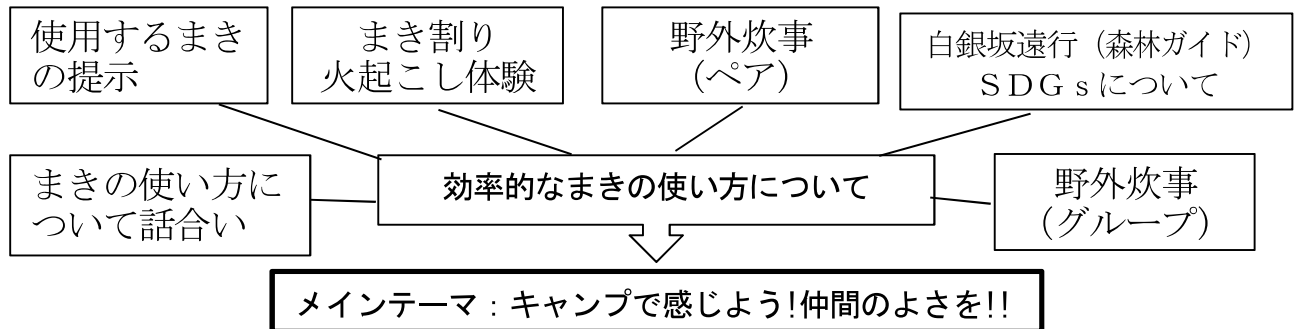
この事業は, 小学5年生から中学生までを対象とした事業である。初めて出会った参加者同士で, 野外炊事やテント泊を行ったり, 活動について話し合ったりすることで, お互いのよさを認め合い, 仲間とのつながりや集団の必要性に気づき, 活動に生かそうとする態度を育成することをねらいとした。

参加者が, 与えられたまきを効率的に使うことを意識しながら活動できるようにペアやグループで話し合う時間を設定した。

(3) プログラムを企画するに当たり

ア テーマの設定

メインのテーマである「キャンプで感じよう!仲間のよさを!!」に迫るために, 効率的なまきの使い方を意識しながら活動できるように以下のようなプログラムを設定した。



イ 事前説明会の開催

参加者に3日間で使用するまきを提示し, 資源を節約するという課題に向けて取り組むことの必要性を伝えた。話し合い活動を取り入れ, お互いを知り, 打ち解け合うことができるようにした。

ウ 森林ガイドの活用

2日目の白銀坂遠行では, 日本たばこ産業株式会社の森林ガイドによるSDGs「陸の豊かさを守ろう」に関連付けた学習の場を設定した。森林資源や森林と日常生活とのつながりについての学びから, まきを無駄にせず, 効率よく使おうとする意識を高めることができた。

エ 活動形態の工夫

自分の意見を出しやすくさせるために, 最初はペアで活動させた。ペアでまきを使うと消費量が多くなるという課題から, まきの消費量を少なくするためにはどうすればよいか考えさせ, 話し合いをもとにグループ編成を行うようにした。

最終日は, 焼き板手形づくりを行い, 全員の作品を一つのパネルに仕上げることで, 共に過ごした時間を振り返らせ, 一体感を味わわせるようにした。

6 日 程

令和3年度 悠遊学舎わくわくウインターキャンプ 日程表			
1月8日(土)		1月9日(日)	1月10日(月)
6	30	起床・洗面 野外炊事 ・ご飯, みそ汁, ベーコンエッグ 移動準備 白銀坂遠行(小雨決行) 「荒天:講話, 白銀坂説明」 8:50 青少研出発 9:30 白銀坂登り口 各ポイント(森林ガイド) さくら見晴台 11:40 島津ゴルフ場登山口 11:55 青少年研修センター着 屋の話合い 野外炊事 ・鍋ラーメン 食材獲得オリエンテーリング 野外炊事 ・アイディア料理 ケーキタイム 入浴(20:00~20:45) 夜の話合い(20:45~22:00) ・一日の振り返り (まきの使い方・仲間のよさについて) ・翌日の計画確認 就寝準備(22:00~22:15) 就寝(22:15)	起床・洗面, 寝袋干し
7	00		野外炊事(～8:15) ・ホットサンド ・スープ
	30		テント撤収・寝袋片付け (8:15～9:30)
8	00		荷物移動
	30		焼き板手形づくり
9	00		3日間の振り返り記入 アンケート・IKR記入
	30		発表会 全体の振り返り
10	00		別れのつどい 解散(～12:30)
	30		
11	00		
	30		
12	00		
	30		
13	00		
	30		
14	00		
	30		
15	00		
	30		
16	00		
	30		
17	00		
	30		
18	00		
	30		
19	00		
	30		
20	00		
	30		
21	00		
	30		
22	00		

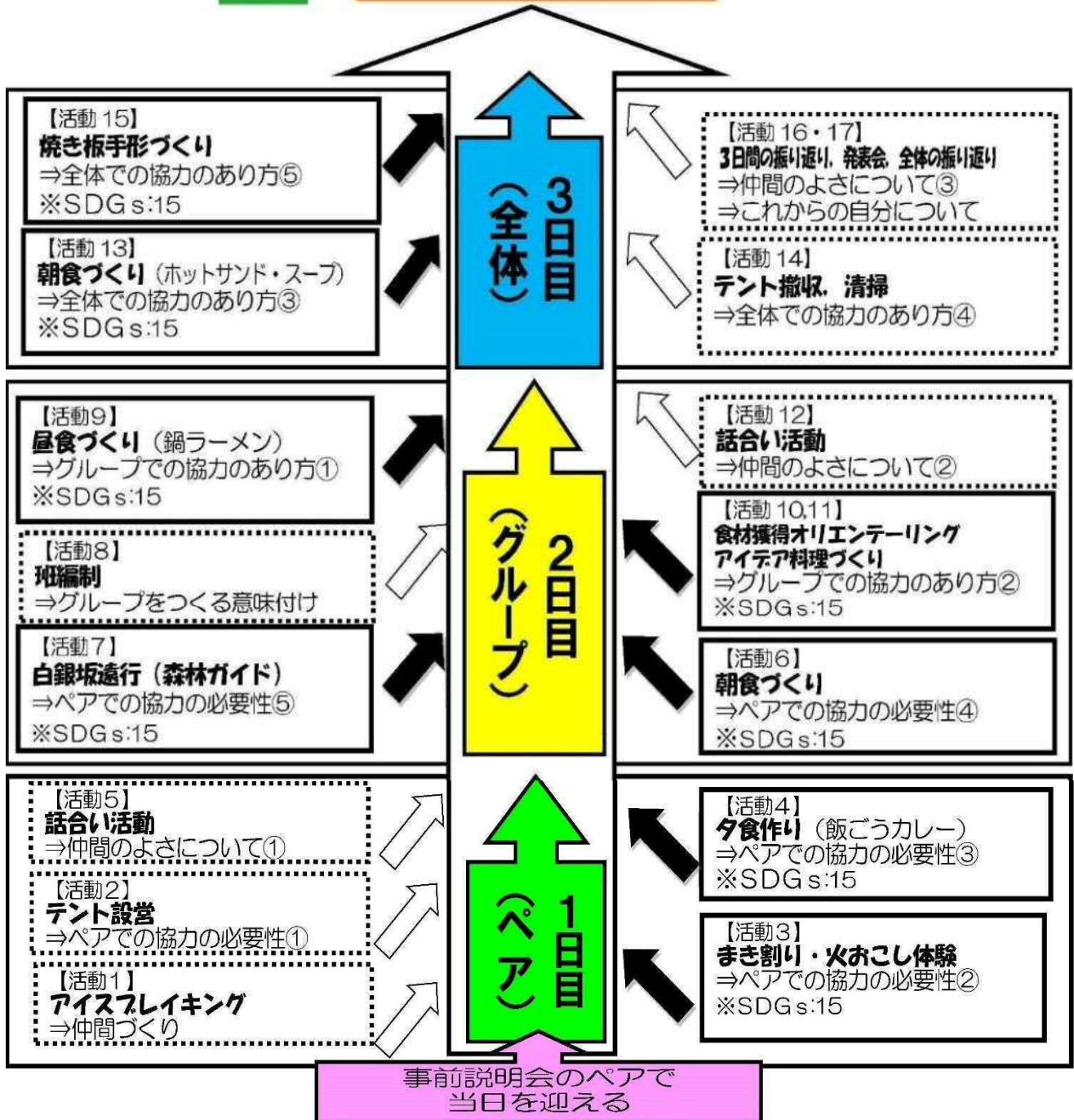
〈悠遊学舎わくわくウインターキャンプ〉

キャンプで感じよう! 仲間のよさを!!



SDGs:15 〈陸の豊かさを守ろう〉

3日間で使用したまきの量



事前説明会のペアで
当日を迎える

【事前説明会】

3日間で使用するまきの量を知る

- ・ オリエンテーション (活動プログラム, 生活・安全面, SDGsについて)
- ・ アイスプレイング
- ・ ペア編成
- ・ ペア活動 (暗号探しゲーム)

8 活動の実際

(1) テント設営，まき割り・火起こし体験，野外炊事（ペア），話し合い活動〈1日目〉

まず，オリエンテーションで，3日間で使うまきの量を提示し，まきを効率よく使えるように，教え合う必要があることへの意識付けを行った。

次に，参加者の緊張を緩和させ，参加者同士の話し合いが活発になるように，アイスブレイキング，レクリエーションを行った。1日目は全ての活動をペアで取り組ませた。その後のテント設営等の活動では，ペアで話し合いながら協力して取り組む姿が見られた。また，他のペアを積極的に手伝う場面も見られた。

まき割り・火起こし体験では，安全に気を付けながら声をかけ合って活動していた。まき割りでは，交互にまきを支えたり，なたを扱ったりしていた。火起こし体験では，道具をうまく扱えず苦労していたが，お互いに励まし合い，煙が少しでも上がると，ペアの垣根を越えて喜び合う姿が見られた。

夕食作りでは，飯ごうを使い，ご飯とカレーを作った。職員は，まきへの火の付け方の基本だけを伝え，まきの組み方についてはペアで考えた。火が消えたり，火力の調整に苦労したりするペアがあったが，無事にカレーを完成させ，おいしく食事をする事ができた。

夜の話し合いでは，1日目で半分近くのまきを使ってしまったことを振り返った。残りのまきの量を確認し，まきの効率的な使い方や仲間のよさについて話し合った。話し合ったことを全体で出し合い，次の日のまきの使い方のヒントとするように共通理解した。



1日目のまき



ペアで野外炊事



夜の話し合い

【参加者の感想（1日目）】

- 細い枝ばかり燃やしてすぐに燃えてしまったので，中くらいのまきも入れていく。
- まきの大きさのバランスが悪く，消えてしまった。火力が安定するように気を付けたい。
- 食べ終わるのが遅くなったとき，先に洗い物をしてくれて助かった。
- てきぱきと動いていてすごいと思った。自分から進んで行動したい。

(2) 野外炊事（ペア→グループ），白銀坂遠行（森林ガイド），話し合い活動〈2日目〉

朝食づくりでは，飯ごうでご飯，味噌汁，ベーコンエッグを作った。前夜の話し合いのアイデアを生かし，細いまきから太いまきへと火がつくようにまきの組み方を工夫していた。

白銀坂遠行では，日本たばこ産業株式会社の森林ガイドから，白銀坂の豊かな森林は，自分たちの生活と多くのつながりがあることを学ぶことができた。「キャンプで使っているまきも森林の木々と関係あるんだよ。大切に使ってね。」と野外炊事と関連付けたアドバイスから，参加者はまきを無駄にせず効率よく使おうという意識につなげていた。ペアよりもグループで野外炊事をした方がまきの量を節約できると考え，主体的にグループ

を構成して活動していた。

昼食・夕食づくりでは、グループで野外炊事を行ったことで、前回よりも多くのまきを残すことができた。火をつける係や具材を切る係等、グループで役割を分担するようになり、「切るのを手伝うよ」「洗うのをやろうか」等の声をかけ合う姿も多く見られるようになった。

夜の話合いでは、「燃え残ったまきも使いたい」という意見が出され、最後までまきを大切にしようとする意識の高まりが感じられた。



2日目のまき



白銀坂遠行（森林ガイド）



グループで野外炊事

【参加者の感想（2日目）】

- SDGsの目標を目指し、自然の美しさや豊かさを守っていきたい。また、野外炊事で使うまきの量もそのときの状況に合わせて使えるようにしたい。
- 余分なまきを使わないように気を付けた。白銀坂遠行で自然とふれあう時に鳥の鳴き声や川の音を聞いてリラックスできた。登山したとき生かしたい。
- 仲間がいると新しいアイデアが浮かび、よりよいおかずができた。一人ではできない大仕事も仲間がいるとやり遂げることができ、仲間のよさを感じた。
- 皿洗いをしているときに仲間が手伝いに来てくれた。そのときはとてもうれしかった。自分も手伝わたら、すぐに終わった。やっぱり仲間はいいなと感じた。

(3) 野外炊事、焼き板手形づくり（グループ→全体）〈3日目〉

「まきの節約」のために、残りわずかと燃え残りのまきを使って、鍋でお湯を沸かし、スープを作った。お湯を沸かす活動では、全員分のお湯をまとめて沸かしていた。時間はかかったが、かなりのまきの節約につながった。

創作活動では、杉板に写した手形を電動糸のこで切り抜いた後、バーナーを使って焼き板にした。完成した全員の「焼き板手形」を一つのパネルにまとめた。全員で観賞することで3日間を過ごした仲間との絆を感じている様子が見られた。

個人発表会では、5つのグループに分かれて、仲間のよさやまきの効率的な使い方について感想を述べた。保護者にも活動の様子や成長の過程について伝えることができた。



燃え残りのまき等で湯沸かし



「焼き板」手形づくり



作品の前で記念撮影

9 事業アンケートから

(1) アンケート結果

○ この事業に参加したきっかけは何ですか。								
自分で決めた。	11	<table border="1"> <tr> <td style="background-color: yellow;">自分で決めた 11</td> <td style="background-color: magenta;">保護者 3</td> <td style="background-color: cyan;">先生 3</td> <td style="background-color: green;">その他 3</td> </tr> </table>	自分で決めた 11	保護者 3	先生 3	その他 3		
自分で決めた 11	保護者 3		先生 3	その他 3				
保護者（父母など）にすすめられた。	3							
先生にすすめられた。	3							
その他（姉が参加していたから）	3							
SDGs：15（まきの使い方）について								
よかった：8人、まあまあよかった：12人 あまりよくなかった：0人 よくなかった：0人								
<ul style="list-style-type: none"> ○ 最初は火がつかなかったけど、空気を入れるようにしたら火がついた。 ○ まきのつみ方をこうすればもっと大切にできるなど工夫をたくさんした。 ○ 最初はどうすればいいか分からなくて、まきをたくさん使っていたが、他のグループの方法を聞き、まきを減らすことができた。 ○ まきの使い方を知ることによって1日目よりもまきの量を減らすことができた。 ○ 白銀坂遠行でSDGsを学べたから、これからは生かしたい。 ○ まきを交差させたり、前使ったまきを再利用したりしてよかった。 ○ 最初何も考えずにまきを使っていたけれど、白銀坂遠行のときに「じゃあ、木をどんどん使っていていいわけじゃないよね。」と言われて、気を使いながらまきを使うようにした。 								
キャンプを通して、仲間のよさを感じる活動について								
よかった：15人 まあまあよかった：5人 あまりよくなかった：0人 よくなかった：0人								
<ul style="list-style-type: none"> ○ 新たなアイデアがうかんだり、アドバイスしたりして、仲間での活動が終わった後、とても達成感があった。 ○ グループで活動することでみんなと協力することができた。また、足りないところを補うことができた。 ○ あまり知らない人でも一緒にしゃべるきっかけになった。 ○ みんなに「これお願いしてもいい？」と言ったら、先にやっていてくれて、とてもよかった。 ○ まきを使った野外炊事で自分が困っていたら助けてくれた。 ○ 初めて会った人ともペアやグループになって、仲間のよさが分かった。 								

(2) 考察

アンケートの結果、自分の意思で参加を決定した子どもは11人で、2泊3日の冬のキャンプに対して、期待感を抱き、意欲的に参加した子どもの割合が高いことが分かった。しかし、開催が延期となったため、事前説明会で決定したペアが変更になるなどして不安を感じた子どもがいたことが推測される。

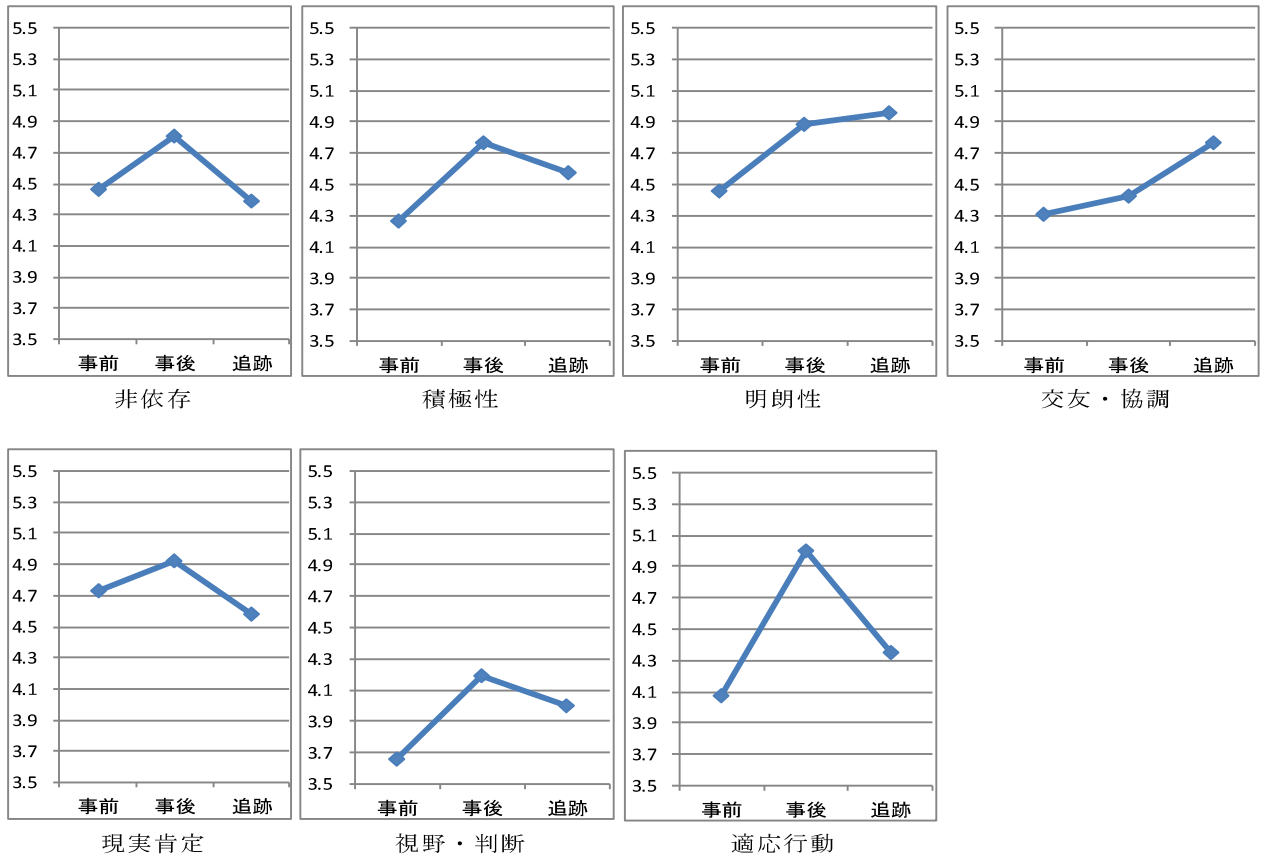
「まきを使った活動」や「仲間のよさを感じる活動」の両方とも全員が「よかった」、 「まあまあよかった」を選択し、満足度が高いことが分かった。感想からも3日間を通して、ペアやグループで協力して取り組んだ野外炊事を中心とした体験活動に満足していたことが伺える結果となった。

3日間のプログラムを通して、ペアからグループ、全体へと活動形態を変えていくことや仲間と語りやすい環境を設定したことが、今回の満足度の高さにつながったのではないかと思われる。

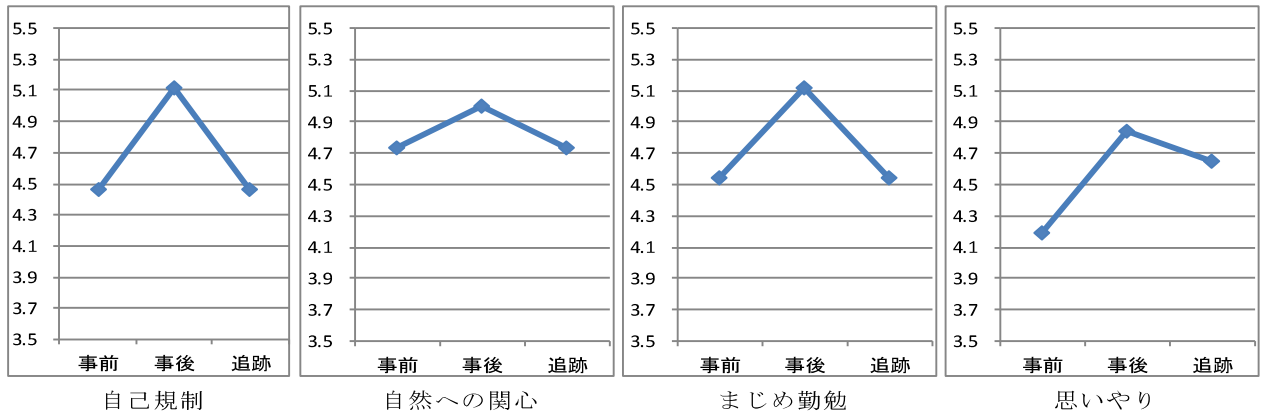
10 I K R調査から

「悠遊学舎わくわくウインターキャンプ」事業成果の分析

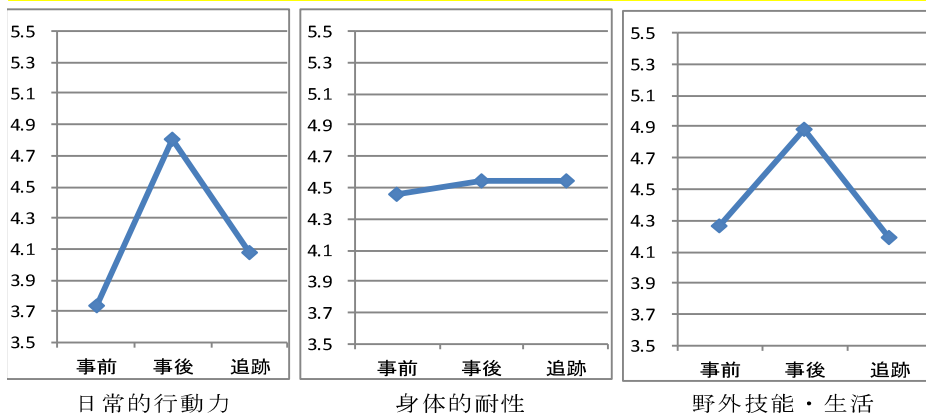
心理的社会的能力



徳育的能力



身体的能力



(1) 調査結果

生きる力			平均値		
			事前	事後	追跡
心理的社会的能力	非依存	いやなことは、いやとははっきり言える 小さな失敗をおそれない	4.46	4.81	4.38
	積極性	自分からすすんで何でもやる 前向きに、物事を考えられる	4.27	4.77	4.58
	明朗性	だれにでも話しかけることができる 失敗しても、立ち直るのがはやい	4.46	4.88	4.96
	交友・協調	多くの人に好かれている だれにでも仲よくできる	4.31	4.42	4.77
	現実肯定	自分のことが大好きである だれにでも、あいさつができる	4.73	4.92	4.58
	視野・判断	先を見通して、自分で計画が立てられる 自分で問題点や課題を見つけることができる	3.65	4.19	4.00
	適応行動	人の話しをきちんと聞くことができる その場にふさわしい行動ができる	4.08	5.00	4.35
徳育的能力	自己規制	自分かってな、わがままを言わない お金やモノのむだ使いをしない	4.46	5.12	4.46
	自然への関心	花や風景などの美しいものに、感動できる 季節の変化を感じるができる	4.73	5.00	4.73
	まじめ勤勉	いやがらずに、よく働く 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.54	5.12	4.54
	思いやり	人のために何かをしてあげるのが好きだ 人の心の痛みがわかる	4.19	4.85	4.65
身体的能力	日常的行動力	早寝早起きである からだを動かしても、疲れにくい	3.73	4.81	4.08
	身体的耐性	暑さや寒さに、まけない とても痛いケガをしても、がまんできる	4.46	4.54	4.54
	野外技能・生活	ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	4.27	4.88	4.19

(2) 考察

身体的耐性を除き、他の項目では、事後が事前を上回る結果となった。0.5ポイント以上、上回ったのが8項目で、約1ポイント上回ったのが「適応行動」「日常的行動力」の2項目であった。この2項目と「野外技能・生活」は、事後になると0.6ポイント以上低くなった。非日常生活から日常生活に戻ることと考えるとある程度予測できた結果である。非日常生活を複数回体験することで、行動力・自主性が高まるのではかと考えられる。

また、追跡調査の結果から「明朗性」「交友・協調」は、追跡が事後を上回る結果となった。まきの効率的な使い方について共通の目標を設定し、未体験である薪割りを協力してやりとげた達成感やペアからグループ、全体への活動形態を変えたことで、仲間のよさについて気付き、このような結果になったのではないかと考えられる。事前説明会でIKRを調査したが、ほぼ3点台で、1ヶ月後実施した事前調査との差が大きく、全体的に見ても特色ある項目は認められなかった。今後事前説明会でもIKRを実施するかは今後の課題である。

11 成果と課題

〈全ての活動を振り返って〉

天候不良による延期のため、ペアやプログラムの変更や新型コロナウイルス感染症対策による活動の制限があった中で、子どもたちは事業のねらいを常に意識しながら、活動することができた。

ペアからグループ、全体へと活動形態が変わっていく中で、徐々に仲間のよさに気付き、協力しながら、まきの効率的な活用について意識しながら活動していく姿が見られた。個々の成長だけでなく、ペアやグループの成長とその効果を感じることができた事業となった。

〈成果〉

- ペアからグループ、全体へとプログラムの活動形態を変えたことで、活動の時に相手を思いやる声かけ・行動ができ、仲間とのつながりや集団の必要性を感じることができた。
- 話し合った効率的なまきの使い方を野外炊事に生かすことができ、まきの使用量の減少につながった。
- 白銀坂遠行での森林ガイドからまきも森林からの産物であることを知り、野外炊事の時にまきを効率的に使おうという意識が高まり、実践へとつながった。

〈課題〉

- 移動時間や荒天等を考慮した時間設定をする必要がある。
- SDGsをより意識させるための話合いの進め方について、工夫が必要である。

【実践事業3】

- 1 事業名 悠遊学舎 夏のわくわくデイ
- 2 期 日 令和3年6月6日（日）
- 3 参加者 小学生男子8人 女子13人 合計21人
- 4 経 費 600円（保険料50円，材料代50円，調理活動代500円）
- 5 事業内容

(1) 事業の趣旨

青少年研修センターの活動プログラムや周辺の自然にふれる体験活動を通して，自然を体感し，自主性や協調性，自己肯定感を養う機会とする。

(2) 事業の特色

本事業は，小学1年生から4年生を対象にした事業である。クラフト活動や簡単クッキング，野外体験活動など，ワンデイキャンプとして様々な活動を体験できる。

また，小学5年生から中学生を対象とした「悠遊学舎わくわくサマーキャンプ」「悠遊学舎わくわくウインターキャンプ」のプレ事業として位置付けている。

(3) プログラムを企画するに当たり

ア プログラム内容の工夫

クラフト活動，簡単クッキング，野外体験活動の3つの活動場面を設定した。これらの活動を，個からグループ，全体へと展開させ，参加者が成功経験や達成感をより大きく得られるようにした。また，協調性を養うために，意図的に他校や異学年の混在したグループ編成を行うようにした。



イ 参加者の緊張の緩和

参加者（特に低学年の児童）の中には，学校外で保護者と離れて活動する経験が少なく，不安を抱えながら来所する参加者がいることが予想された。そこで，活動に入る前に参加者同士や職員との関係づくりのためのアイスブレイキングを行うことで，緊張や不安を緩和させ，安心して活動に取り組むことができるようにした。

ウ 火や包丁，のこぎりを扱う場面の設定

焼きそばや野菜スープを調理する際に火を取り扱う場面を設定した。併せて，1年生から4年生は学校の学習で包丁を扱うことがなく，さらに家庭においても包丁を使う経験が少ないと予想されたため，食材を切るなどの簡単な調理に包丁を用いる場面を設定し，家庭教育の補完となるようにした。なお，クラフト活動では，「丸太切り体験」でのこぎりを使う場面を設定した。

6 全日程

9:30～ 9:45	9:45～10:00	10:00～11:00	11:00～13:30	13:30～14:45	14:45～15:00
受付 	出会いのつどい 及び オリエンテーション アイスブレイキング	【活動Ⅰ】 丸太切り体験 ネーム作り	【活動Ⅱ】 ＜簡単クッキング＞ 焼きそば 野菜スープ スモア	【活動Ⅲ】 青少研もるつく ＜雨天時＞ 室内運動会	別れのつどい 

7 活動の実際

受付時、保護者が安心して預けられるよう「保護者用資料」を配布し、各活動がどのように展開されていくのかを詳しく知らせた。また、参加者には「参加者用資料」を配布し、活動内容とタイムスケジュールを示し、出会いのつどいまでの待ち時間に確認してもらうことで、一日の活動の見通しをもたせた。

オリエンテーションではアイスブレイキングを行い、簡単なゲームを通して、初対面の参加者間の交流を促し、安心して活動に取り組める雰囲気作りを行った。短い時間の設定だったが、時間の経過とともに少しずつ雰囲気は和んでいった。

クラフト活動では、のこぎりを用いての「丸太切り体験」に取り組み、自分で切った年輪プレートを「ネームプレート」として活用できるようにした。のこぎりの安全な使い方を説明したことで、参加者が積極的に取り組んでいた。また、参加者に達成感・成就感をより多く味わわせるために職員の支援を最小限に抑えたことで、試行錯誤しながら時間を掛けて丸太切り体験を行うことができた。そのため、丸太を切り終えたときの喜びは大きかった。

簡単クッキングでは、焼きそば作りを行った。包丁や火を使っの調理活動であったため、安全面については十分に配慮をし、取り組ませた。包丁の扱いについて不慣れな参加者は、真剣に包丁を握り、野菜をカットしていた。アルミホイルに包み、加熱し出来上がった焼きそばを見つめる表情は、満足感と自信に溢れていた。

野外体験活動は、「青少研もるっく」というニュースポーツを体験した。チーム戦で点数を計算する場面もあり、異年齢の集団が頭と身体を思い切り動かした。初めての体験となるゲームだったため、はじめはルールを理解することで必死だったが、次第に慣れて、チーム内で作戦を話し合いながら活動する様子が見られた。



「丸太切り体験」の様子



「簡単クッキング」の様子



「青少研もるっく」の様子

【参加者の感想】

- 同じ学校の人はいなかったけど、友だちができて嬉しかった。また来たいぐらい楽しかった。
- 初めて入ったときは、すごくドキドキして不安になった。でも少しずつ時間がたつとわくわく楽しい気持ちになった。
- 丸太が上手に切れて嬉しかった。「もるっく」で1回勝つことができて嬉しかった。

8 事業アンケートから

(1) アンケート結果

今日の活動について◎、○、△、×をつけてください。

◎とてもよかった ○よかった △あまりよくなかった ×よくなかった

	◎	○	△	×
丸太切り体験, ネーム作り	17	4	0	0
焼きそば, 野菜スープ作り	14	7	0	0
スマア	17	4	0	0
青少研もるっく	15	6	0	0

(2) 考察

全ての活動で「とてもよかった」「よかった」という結果であった。

丸太切り体験については、初めてのこぎりを使ったという子どもたちが多かったが、全員がネームまで完成させることができた。自分でやり遂げたという達成感があり、充実した活動であったと考える。

焼きそばや野菜スープ、スマアについては、刃物や火を扱い、自分で調理するところに満足感を感じることができたのではないかと考える。

青少研もるっくについては、ルールを理解することがやや難しかったようだが、慣れてくるとチーム内で作戦を話し合いながら活動する様子が見られた。頭と身体を使って楽しむことができ、子どもたちも満足できる活動であったと考える。

9 I K R調査から

今回の調査においては、28項目の内、心理的社会的能力から「自分から進んで何でもやる」や「小さな失敗をおそれない」などの6項目、徳育的能力から「自分かってなわがままを言わない」や「季節が変わったことに気付くことができる」などの3項目、身体的能力から「のこぎりや包丁などを上手に使える」の1項目の計10項目に絞り込み、体験活動の展開前と展開後で参加者の変容を比較することとし、1か月後に追跡調査も実施した。

なお、通常6段階での評価を行うところを、小学校低学年がいることを踏まえて4段階の評価とした。

項目	4	3	2	1
1 自分から進んでやる。				
2 小さな失敗をおそれない。				
3 自分でできることに挑戦する。				
4 自分でできることに挑戦する。				
5 自分から進んでやる。				
6 小さな失敗をおそれない。				
7 自分でできることに挑戦する。				
8 自分でできることに挑戦する。				
9 自分から進んでやる。				
10 小さな失敗をおそれない。				

<活動前>

項目	4	3	2	1
1 自分から進んでやる。				
2 小さな失敗をおそれない。				
3 自分でできることに挑戦する。				
4 自分でできることに挑戦する。				
5 自分から進んでやる。				
6 小さな失敗をおそれない。				
7 自分でできることに挑戦する。				
8 自分でできることに挑戦する。				
9 自分から進んでやる。				
10 小さな失敗をおそれない。				

<活動後>

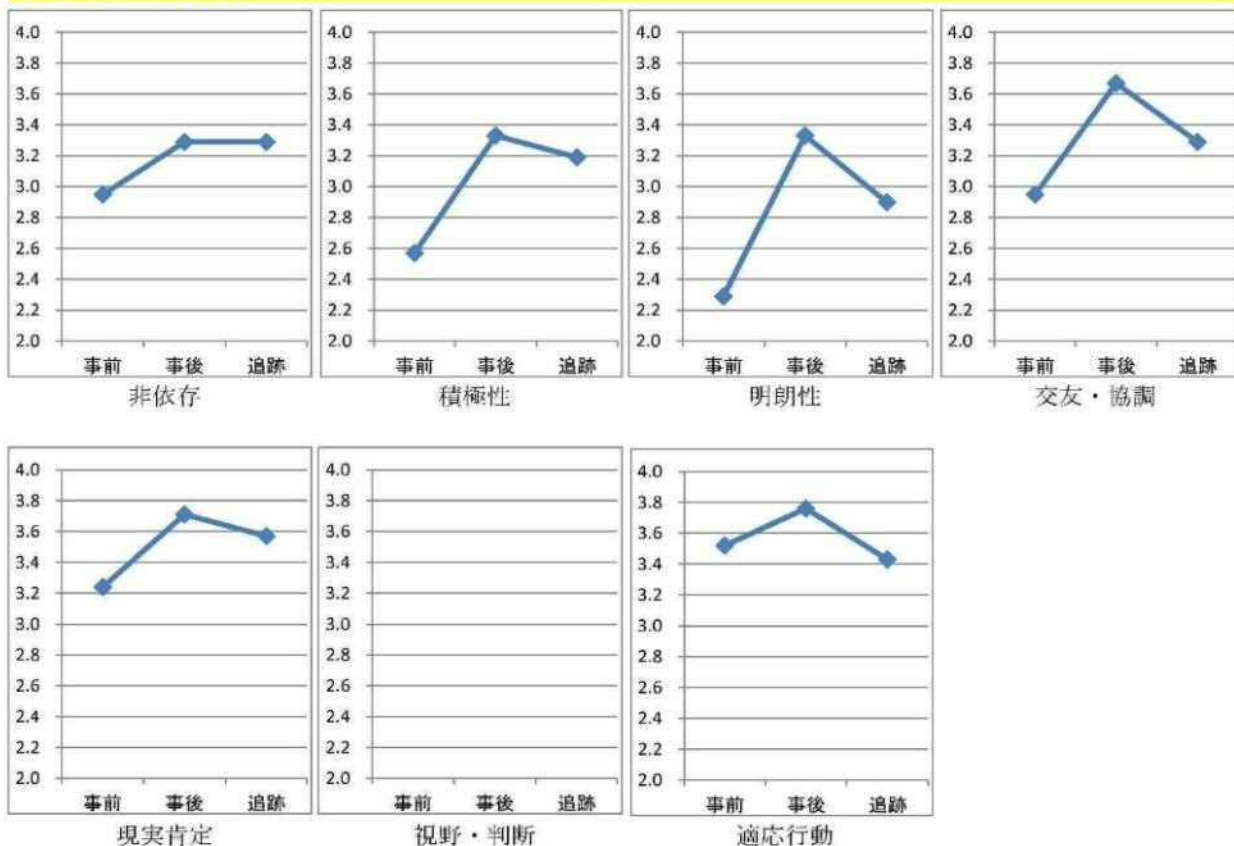
項目	4	3	2	1
1 自分から進んでやる。				
2 小さな失敗をおそれない。				
3 自分でできることに挑戦する。				
4 自分でできることに挑戦する。				
5 自分から進んでやる。				
6 小さな失敗をおそれない。				
7 自分でできることに挑戦する。				
8 自分でできることに挑戦する。				
9 自分から進んでやる。				
10 小さな失敗をおそれない。				

<活動の1か月後>

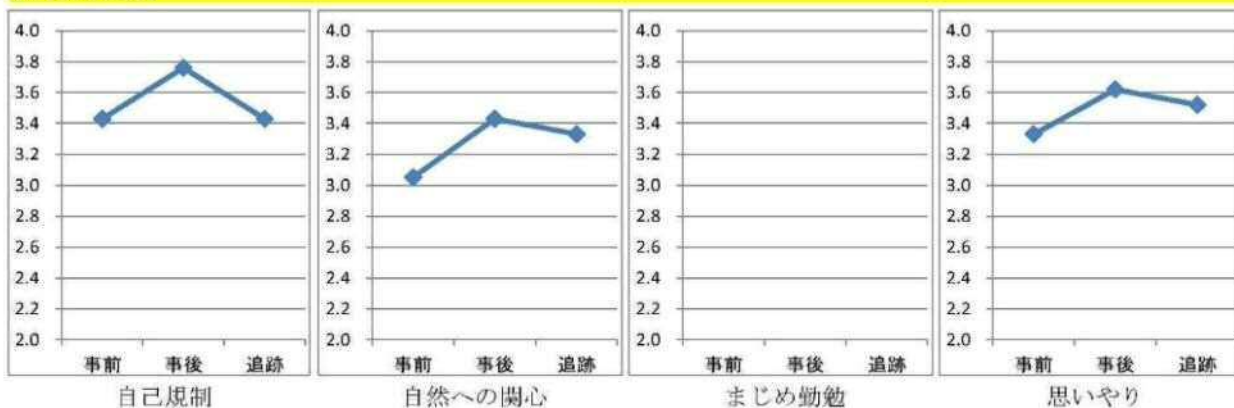
(1) 調査結果

「悠遊学舎 夏のわくわくデイ」事業成果の分析

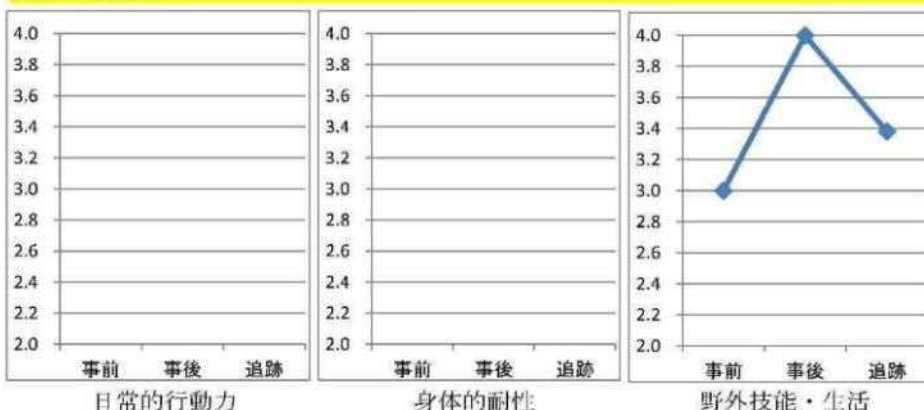
心理的社会的能力



徳育的能力



身体的能力



生きる力		平均値		
心理的社会的能力		事前	事後	追跡
非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える 15. 小さな失敗をおそれない	2. 95	3. 29	3. 29
積極性	11. 自分からすすんで何でもやる 25. 前向きに、物事を考えられる	2. 57	3. 33	3. 19
明朗性	5. だれにでも話しかけることができる 19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	2. 29	3. 33	2. 90
交友・協調	7. 多くの人に好かれている 21. だれとでも仲よくできる	2. 95	3. 67	3. 29
現実肯定	9. 自分のことが大好きである 23. だれにでも、あいさつができる	3. 24	3. 71	3. 57
視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる 17. 自分で問題点や課題を見つけることができる			
適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる 22. その場にふさわしい行動ができる	3. 52	3. 76	3. 43
徳育的能力				
自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない 28. お金やモノのむだ使いをしない	3. 43	3. 76	3. 43
自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる 20. 季節の変化を感じるができる	3. 05	3. 43	3. 33
まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く 26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる			
思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ 16. 人の心の痛みがわかる	3. 33	3. 62	3. 52
身体的能力				
日常的行動力	13. 早寝早起きである 27. からだを動かしても、疲れにくい			
身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない 18. とても痛いケガをしても、がまんできる			
野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える 24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3. 00	4. 00	3. 38

(2) 考察

本事業は、コロナ禍にあり、参加定員を減らしたり、天候不良等で、実施内容を一部変更したりしたこともあり、意図的・計画的な活動プログラムを提供することが難しい状況であった。

また、I KR調査が小学4年生以上を対象としていることを踏まえると、小学1～3年生にとっては質問項目の内容理解が十分とは言えず、結果については、参考として集約し、以下のような傾向が見られた。(4年生6人、3年生3人、2年生6人、1年生6人)

○ すべての項目において、事後のポイントが事前を上回った。(平均+0.56)

○ 事前のアンケートで値の最も低かった質問3「誰にでも話しかけることができる」では、事後が事前に比べ1.04ポイント上昇しており、明朗性において大きな変容が見られた。事業当日、様々な活動に入る前に、緊張を解きほぐすためのアイスブレイキングを取り入れたことが、大きく寄与していると思われる。また、追跡調査(1か月後)においても、事後と比べ0.43ポイントの下降で、事前と比べても0.61ポイント上昇していた。

(質問3 : 2.29→3.33→2.90)

- 質問10「のこぎりや包丁などを上手に使える」では、事後のポイントが満点(4.0)であった。「丸太切り体験」で「のこぎり」,「簡単クッキング」では、「包丁」を自分で使うことで達成感を味わうとともに、成功体験を積み重ねていくことで自信につながるのではないかと考える。
- 事前と事後の変容が最も見られなかった質問が「人の話をきちんと聞けることができる」であった。事前のポイントが高かったことも影響しているが、事後のポイントは、0.24ポイントの上昇に止まっている。マスク越しであること、適度な距離を保つこと、必要以上の接触を避けるなどの新型コロナウイルス感染症拡大防止策がその要因となったのではないかと考える。(質問6 : 3.52→3.76→3.43)
- 追跡調査で事前よりポイントが下がった、或いは同じだった質問が、「人の話をきちんと聞ける」「自分勝手なわがままを言わない」であった。いずれも、事前のポイントが高かったことも影響しているが、事業後の自分自身の意識が高まったことで、自己評価がより厳しくなったのではないかと考える。

以上の結果から、コロナ禍にあり、様々な制限のある中での事業ではあったが、参加した子どもたちはクラフト活動や簡単クッキング、野外体験活動を通して、協調性や自主性、自己肯定感、規範意識などが一様に高まっている様子が確認できた。この事業では、初めて親から離れて活動した子どもも多く、始めは緊張している様子も見られたが、同じ時間を過ごす中で共通の体験を通してコミュニケーションが深まっていったようである。



10 事業の成果と課題

(1) 成果

- コロナ禍の影響で、活動の展開は個が中心となったが、お互いにコミュニケーションを取れるように活動内容を工夫したことで、時間の経過とともに参加者同士の距離が縮まり、笑顔で仲良く過ごす姿が多く見られた。
- クラフト活動や簡単クッキングでは、達成感・成就感を味わわせるため、職員の支援を最小限に抑えた。そのことにより、参加者は自主的かつ協力的に取り組み、それが満足度・自己肯定感の向上につながった。
- 日頃の生活では体験できない「丸太切り体験」を設定した。その結果、のこぎりを使ったり、ネームプレートを仕上げたりする作業に集中して取り組み、満足している様子が見られた。

(2) 課題

- 異年齢集団に対する職員の支援の仕方について、職員のスキルをさらに高めていく必要がある。
- 複数回参加している児童もいるため、飽きさせない内容の工夫が必要である。

【実践事業4】

- 1 事業名 悠遊学舎 秋のわくわくデイ
- 2 期 日 令和3年11月14日（日）
- 3 参加者 小学生男子6人 女子9人 合計15人
- 4 経 費 500円（保険料50円，材料代50円，調理活動代400円）
- 5 事業内容

(1) 事業の趣旨

青少年研修センターの活動プログラムや周辺の自然にふれる体験活動を通して、自然を体感し、自主性や協調性、自己肯定感を養う機会とする。

(2) 事業の特色

本事業は、小学1年生から4年生を対象にした事業である。クラフト活動や簡単クッキング、野外体験活動など、ワンデイキャンプとして様々な活動を体験できる。

また、小学5年生から中学生を対象とした「悠遊学舎わくわくサマーキャンプ」「悠遊学舎わくわくウインターキャンプ」のプレ事業として位置付けている。

(3) プログラムを企画するに当たり

ア プログラム内容の工夫

クラフト活動，簡単クッキング，野外体験活動の3つの活動場面を設定した。これらの活動を，個からグループ，全体へと展開させ，参加者が成功経験や達成感をより大きく得られるようにした。また，協調性を養うために，意図的に他校や異学年の混在したグループ編成を行うようにした。



イ 参加者の緊張の緩和

参加者（特に低学年の児童）の中には，学校外で保護者と離れて活動する経験が少なく，不安を抱えながら来所する参加者がいることが予想される。そこで，活動に入る前に参加者同士や職員との関係づくりのためのアイスブレイキングを行うことで，緊張や不安を緩和させ，安心して活動に取り組むことができるようにした。

ウ 火や包丁，のこぎりを扱う場面の設定

簡単クッキングで調理する際に，火を取り扱う場面を設定している。併せて，1年生から4年生は学校の学習で包丁を扱うことがなく，さらに家庭においても包丁を使う経験が少ないと予想されるため，食材を切るなどの簡単な調理に包丁を用いる場面を設定し，家庭教育の補完となるようにした。なお，クラフト活動では，「丸太切りに挑戦」「鉛筆立て作り」で，のこぎりを使う場面を設定した。

6 全日程

9:15～ 9:45	9:45～10:10	10:10～11:30	11:30～13:30	13:30～15:00	15:00～15:15
受付 	出合いのつどい 及び オリエンテーション アイスブレイキング	【クラフト活動】 丸太切りに挑戦 鉛筆立て作り	【簡単クッキング】 七輪で手作りピザ 焼き芋	【わくわくタイム】 全力で遊ぼう 秋を探そう	別れのつどい 

7 活動の実際

受付時、保護者が安心して預けられるよう「保護者用資料」を配布し、各活動がどのように展開されていくのかを詳しく知らせた。また、参加者には「参加者用資料」を配布し、活動内容とタイムスケジュールを示し、出会いのつどいまでの待ち時間に確認してもらうことで、一日の活動の見通しをもたせた。

オリエンテーションではアイスブレイキングを行い、簡単なゲームを通して、初対面の参加者間の交流を促し、安心して活動に取り組める雰囲気作りを行った。短い時間設定だったが、時間の経過とともに少しずつ雰囲気は和んでいった。

クラフト活動では、のこぎりを使って丸太切りに挑戦した。参加者は、「鉛筆立て作り」を視野に入れ、自分好みの丸太を選び、試行錯誤しながら時間を掛けて丸太を切っていた。事前にのこぎりの安全な使い方を説明し、また、参加者同士で協力することの大切さや素晴らしさの話をすることで、意欲的に取り組む様子が見られた。さらに、参加者に達成感・成就感をより多く味わわせるために、職員の支援を最小限に抑えたことで、どの参加者にとっても、大きな喜びが得られた活動となった。

簡単クッキングでは、七輪を用い、手作りピザ作りを行った。包丁や火を使っての調理活動であるため、安全面については十分に留意し、慎重に活動に取り組ませた。包丁の扱いに不慣れた参加者については、必要に応じて職員が補助し、怪我の防止に努めた。

生地から作り、自分で切った野菜等を盛り付け、焼き上がったピザを前にした参加者は、満足感・達成感に満ち溢れ、自信を深めた様子であった。

野外体験活動の「全力で遊ぼう」では、仲良しアスレチック・草スキー・昔遊び（かっこいい車・竹馬・竹ぽっくり）、マウンテンバイクの試乗体験のうち、自分で遊びたい遊びを選択し、身体を思いっきり動かした。また、「秋を探そう」では、所内散策に加え、芋掘り体験を行った。畑から出てくるサツマイモに、一喜一憂しながら、楽しい収穫体験の時間を過ごせた。昼食時には、事前に準備したサツマイモで焼き芋をした他、収穫したサツマイモは、お土産として家庭に持ち帰ったので、「家族で食べたい。」などの感想が寄せられた。



「丸太切り体験」



「芋掘り体験」



「昔遊び体験（竹馬）」



「ピザ作り体験」

【参加者の感想】

- 最初は初めてで、緊張したけれど、グループの人と話せるようになり、とっても楽しくなりました。鉛筆立てやピザなど、上手に作れてよかったです。
- いろいろな物を作って、とても楽しかったです。友達もできました。
- 秋を感じられ、楽しかった。冬も参加したいです。
- ピザを作ることができて、おもしろかったです。

8 事業アンケートから

(1) アンケート結果

今日の活動について◎、○、△、×をつけてください。

◎とてもよかった ○よかった △あまりよくなかった ×よくなかった

	◎	○	△	×
全力で遊ぼう（雨天時：室内運動会）	13	2	0	0
秋を探そう	12	2	1	0
七輪で手作りピザ作り，焼き芋	15	0	0	0
丸太切りに挑戦，鉛筆立て作り	13	2	0	0

(2) 考察

全力で遊ぼうでは、興味がある遊びを選択し、身体を思いっきり動かすことができた。初めて体験する昔遊びについても、興味をもって参加する様子が見られた。

秋を探そうでは、「あまりよくなかった」という結果が一件あったが、これは、芋掘り体験で大きなサツマイモに出会えなかったことによるものであった。

七輪での手作りピザ作りについては、刃物や火を扱い、自分で調理するところに満足感を得ることができたのではないかと考える。生地作りから野菜等のカット、盛り付けまで、どの行程においても意欲的に取り組んでいた。

丸太切り体験では、のこぎりを初めて使う参加者もいたが、最後まで自分で丸太を切ることができ、やり遂げたという達成感を味わっていたようである。また、自分で切った丸太を用い、鉛筆立てを制作したが、どんぐりやまつぼっくりを使い、個性溢れる飾り付けをするなど、充実した活動であったと考える。

9 IKR調査から

今回の調査においては、28項目の内、心理的社会的能力から「自分から進んで何でもやる」や「小さな失敗をおそれない」などの6項目、徳育的能力から「自分かってなわがままを言わない」や「季節が変わったことに気付くことができる」などの3項目、身体的能力から「のこぎりや包丁などを上手に使える」の1項目の計10項目に絞り込み、体験活動の展開前と展開後で参加者の変容を比較することとし、追跡調査も実施した。

また、通常6段階での評価を行うところを、小学校低学年がいることを踏まえて4段階の評価としている。

この表は「今の自分をみつめてみよう!」というタイトルで、10項目の自己評価を行うための表である。各項目は4段階（★、★★、★★★、★★★★）で評価される。表の右側には「学年」の記入欄がある。

項目	★	★★	★★★	★★★★
1 自分から進んで何でもやる。				
2 小さな失敗をおそれない。				
3 状況に応じて話し合いができる。				
4 状況に応じて判断ができる。				
5 話し合いのことが得意である。				
6 人の話をきちんと聞くことができる。				
7 自分かってな、わがままを言わない。				
8 季節が変わったことに気付くことができる。				
9 人に話を聞かされておけるのが得意である。				
10 いろいろな器や道具を上手に使える。				

<活動前>

この表は「今より進んでみよう!」というタイトルで、活動後の自己評価を行うための表である。表の構成は活動前と同じである。

項目	★	★★	★★★	★★★★
1 自分から進んで何でもやる。				
2 小さな失敗をおそれない。				
3 状況に応じて話し合いができる。				
4 状況に応じて判断ができる。				
5 話し合いのことが得意である。				
6 人の話をきちんと聞くことができる。				
7 自分かってな、わがままを言わない。				
8 季節が変わったことに気付くことができる。				
9 人に話を聞かされておけるのが得意である。				
10 いろいろな器や道具を上手に使える。				

<活動後>

この表は「今の自分をみつめてみよう!」というタイトルで、活動の1か月後の自己評価を行うための表である。表の構成は活動前と同じである。

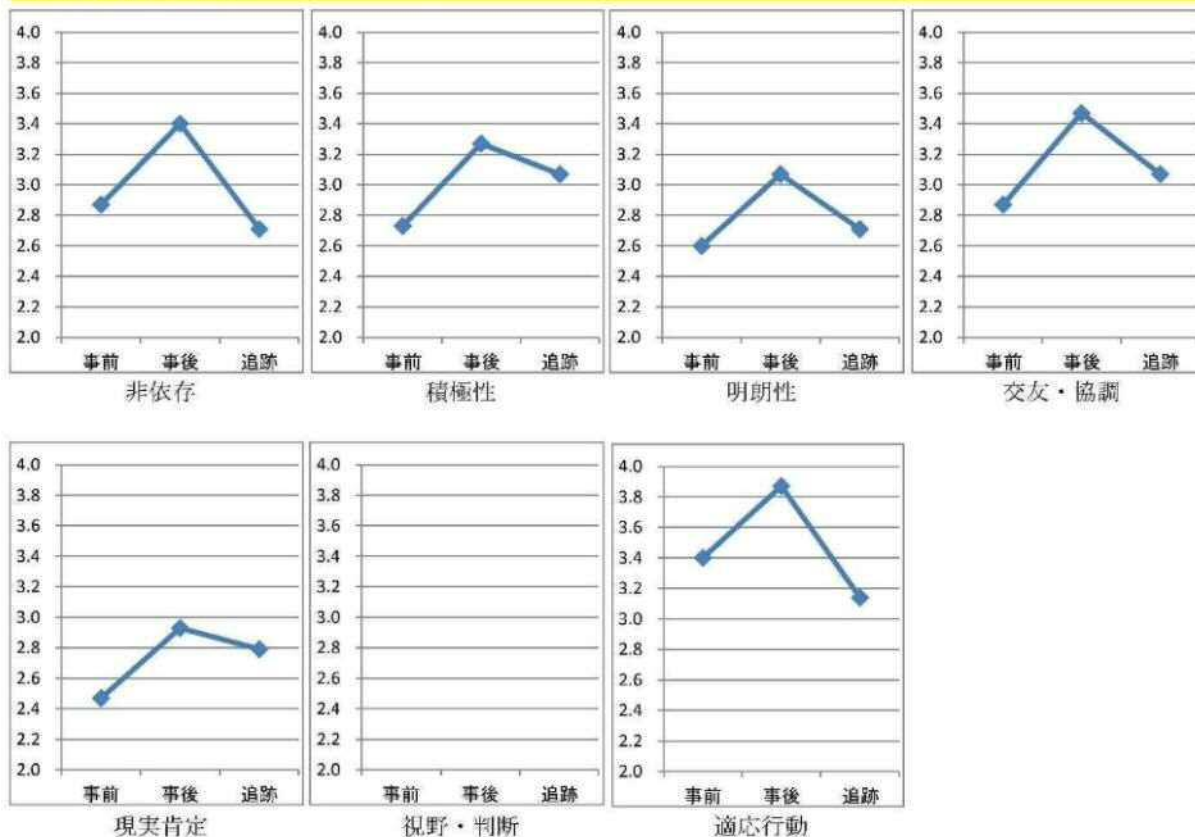
項目	★	★★	★★★	★★★★
1 自分から進んで何でもやる。				
2 小さな失敗をおそれない。				
3 状況に応じて話し合いができる。				
4 状況に応じて判断ができる。				
5 話し合いのことが得意である。				
6 人の話をきちんと聞くことができる。				
7 自分かってな、わがままを言わない。				
8 季節が変わったことに気付くことができる。				
9 人に話を聞かされておけるのが得意である。				
10 いろいろな器や道具を上手に使える。				

<活動の1か月後>

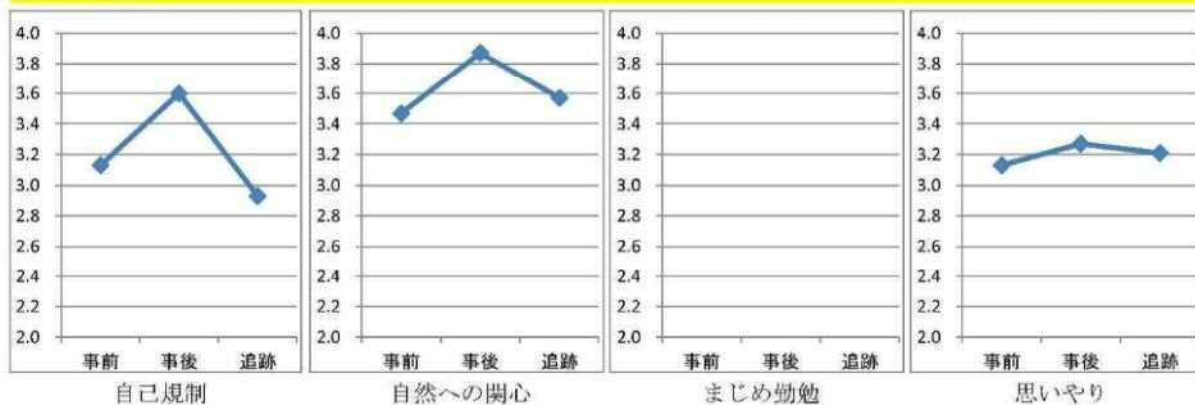
(1) 調査結果

「悠遊学舎 秋のわくわくテイ」事業成果の分析

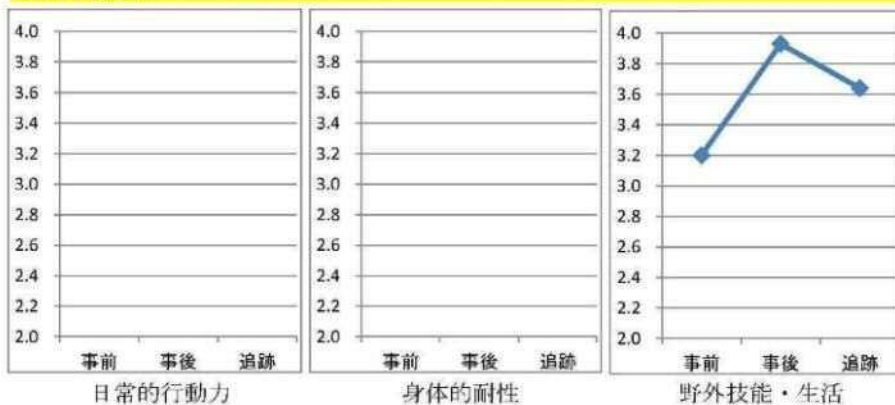
心理的社会的能力



徳育的能力



身体的能力



生きる力		平均値		
		事前	事後	追跡
非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える 15. 小さな失敗をおそれない	2. 87	3. 40	2. 71
積極性	11. 自分からすすんで何でもやる 25. 前向きに、物事を考えられる	2. 73	3. 27	3. 07
明朗性	5. だれにでも話しかけることができる 19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	2. 60	3. 07	2. 71
交友・協調	7. 多くの人に好かれている 21. だれとでも仲よくできる	2. 87	3. 47	3. 07
現実肯定	9. 自分のことが大好きである 23. だれにでも、あいさつができる	2. 47	2. 93	2. 79
視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる 17. 自分で問題点や課題を見つけることができる			
適応行動	8. 人の話しをきちんと聞くことができる 22. その場にふさわしい行動ができる	3. 40	3. 87	3. 14
自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない 28. お金やモノのむだ使いをしない	3. 13	3. 60	2. 93
自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる 20. 季節の変化を感じることができる	3. 47	3. 87	3. 57
まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く 26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる			
思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好き 16. 人の心の痛みがわかる	3. 13	3. 27	3. 21
身体的能力				
日常的行動力	13. 早寝早起きである 27. からだを動かしても、疲れにくい			
身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない 18. とても痛いケガをしても、がまんでき			
野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使用できる 24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3. 20	3. 93	3. 64

(2) 考察

本事業は、コロナ禍にあり、例年募集していた40人枠を18人（参加者は15人）へと縮小し、募集を開始した。前日までの天候不良の影響により、当日に活動プログラム順を一部入れ替えて実施することとなった。

悠遊学舎シリーズでは、IKR調査を実施しているが、秋のわくわくデイは、小学校1年生から4年生までの児童を対象にしている。IKR調査が小学校4年生以上を対象としていることを踏まえると、小学1～3年生にとっては質問項目の内容理解が十分とは言えず、結果については、参考として集約し、以下のような傾向が見られた。（1年生4人、2年生1人、3年生6人、4年生4人）

- すべての項目において、事後のポイントが事前を上回った。（平均+0.48）
- 事前のアンケートで値の最も低かった質問5「自分のことが大好きだ」では、事後が事前に比べ0.46ポイント上昇しており、「現実肯定」において変容が見られた。様々な活動プログラムを通して、成功体験を積み重ねることで、やればできる自分との出会いが自己肯定感の高まりをもたらしたものだ考える。また、追跡調査（1か月後）にお

いても、事後との比較では0.14ポイントの下降に留まり、事前との比較では0.32ポイント上昇する結果となった。(質問5 : 2.47→2.93→2.79)

- 質問10「のこぎりや包丁などを上手に使える」では、事後が事前に比べ0.73ポイント上昇しており、「野外技能・生活」において、大きな変容が見られた。丸太切り体験でのこぎりを、簡単クッキングでは、包丁を自分で扱うことで、達成感や満足感を味わえたことと、ものを作ることやその過程を体験することの楽しさや喜びを積み重ねていくことが自信につながったのではないかと考える。(質問10 : 3.20→3.93→3.64)
- 事前と事後の変容が最も見られなかった質問が「人のために何かをしてあげるのが好きだ」の項目であった。事前のポイントが低いわけではないが、事後のポイントは、0.14ポイントの上昇に止まっている。これは、本事業がコロナ禍での開催であり、参加者同士適度な距離を保つこと、必要以上の接触を避けるなど、新型コロナウイルス感染症拡大防止策が、協力して何かを成し遂げる場面を妨げていることも一因になったのではないかと考える。(質問9 : 3.13→3.27→3.21)
- 追跡調査で事前よりポイントが下がった質問は、「小さな失敗をおそれない」「人の話をきちんと聞くことができる」「自分勝手な、わがままを言わない」であった。いずれもの項目も、事前のポイントが低いわけではないが、事業後の自分自身の意識の高まりが自己評価を厳しくさせていること、長期的な視点で見ると、コロナ禍による体験活動の不足が原因ではないかと考える。

参加した子どもたちは、始めは緊張している様子であったが、同じ時間を過ごす中で徐々に打ち解け合い、共通の体験を通して、コミュニケーションが深まったようである。

また、普段なかなか体験できないクラフト活動や調理活動、散策を含む野外活動を通して、自分の成長を感じるとともに、家族への感謝の気持ちや所属感も芽生えたように思う。明確な目的のもと、ニーズを踏まえた効果的な体験活動を設定するのであれば、今後も家庭や子どもたちにとって、魅力的な事業を展開できるものだと考える。



10 事業の成果と課題

(1) 成果

- やり遂げる喜びを味わわせるために、丸太切りの場を設定した。安全に注意しながら集中して活動する姿が見られた。個における達成感やグループでの連帯感なども感じられ、十分満足できる結果になった。
- 研修課畑の作物を活用し、収穫の喜びや季節を感じられる旬の物に触れることができる場の提供ができたのと同時に、参加者に還元することができた。
- 職員の配置や役割分担を明確化することで、安全面や衛生面を含め、効果的な指導とスムーズな運営に結び付けることができた。

(2) 課題

- 調理に時間を要することから、ゆとりのある時間設定が必要である。また、七輪での調理は火加減が難しい面があり、細やかな管理や見届けが必要である。
- 天候不良等によるプログラムの順序変更を想定したストーリー作りと、場の設定が必要である。
- 体験させたい活動内容の精選と、その時間の確保が大事である。

8 研究のまとめ

本年度も、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、子どもたちにとっては、自然体験や社会体験の機会がさらに減少する状況となった。その中で、数少ない体験活動の機会に質の高い直接体験を提供することの重要性を自覚しながら活動プログラムを展開し、研究を推進してきた。

集団宿泊学習における I K R 調査では、全ての調査校において「生きる力」の向上が見られ、集団宿泊学習の有用性を検証できた。コロナ禍にあり、規模を縮小して実施する傾向が見られるこの時期に、このような成果が得られたことはとても有意義であった。この検証結果を学校へ伝え、体験活動の有効性を再認識してもらえかが課題である。そのはじめの一歩として、令和4年度当初に開催される校長会や教頭会で簡易版のリーフレットを配布し、周知する計画を進めている。また、集団宿泊学習においても「悠遊学舎シリーズ」のように事前・事後調査以外にも追跡調査まで実施することで、さらに効果的な分析データを得ることができると考える。

「悠遊学舎シリーズ」では、「悠遊学舎わくわくサマーキャンプ」から表出した課題を工夫・改善し、SDGsを盛り込んだ「悠遊学舎わくわくウインターキャンプ」へと発展させて展開することができた。I K R 調査の結果からも、「体験活動」と「生きる力」の関連性を検証することができ、成果を確認することができた。

教科に関連付けた活動プログラムの検証においては、単元指導案を活用した展開を行い、成果と課題を見出すことができた。さらに検証を積み重ね、工夫・改善していくことで、今後、学校にとって使いやすいものになっていくものと考えられる。また、新たに3つの単元指導案の作成も行い、昨年度と併せて9つの単元指導案を作成した。これらも学校に広く周知し、活用してもらえよう働きかけていかなければならない。現段階では、既存の活動プログラムを教科等に関連付けて単元指導案を作成したが、今後は、学校が「活用してみたい」と思うような教科等との関連付けを意識した新規の活動プログラムの開発、さらにはSDGsを盛り込んだ活動プログラムの開発ができれば、より一層、教育課程への位置付けがしやすくなるのではないかと考える。

プロジェクト研究を通しての職員の感想

- 指導案を作成することそのものや、研修で指導案について討議することが非常によい研修になった。
- 教科と関連付けられるプログラム数が増えることで、利用する学校にもメリットがあるので、その周知に力を入れていければよいと思う。
- 本年度、8施設協議会においても教科に関連付けたプログラム指導案の作成に取り掛かっているため、次年度も継続して研究を深めていきたい。
- 指導案の内容をより精選し、読みやすく分かりやすい指導案を作成したい。
- 活動プログラムを基に教科と関連付けて指導案を作成するとなると、教科や単元に限りがある。